社会人教育と大学教育の融合例

岡村　浩

はじめに

書文化活動には、①作品制作②書論書道史研究③鑑賞　の他にも、他分野との融合によって従来のようにはけっして割り切れない内容も徐々に登場し、また誕生しなければ斯界の行末は見通しが明るいものとは思えない。とかく一般には、①に掲げた中でも展覧会のための作品制作活動が、書の全てであると見られがちである。そこで本考では見る楽しみ、地域社会での新しい文化活動の実践例として、二例を報告したい。

一、近代書の源流　日下部鳴鶴展

会場は明治四十年代に建った素封家の純和風迎賓館（写真を後掲）。そもそも掛軸や扁額・屏風を畳敷にて鑑賞することが余程希なことになった今日、ささやかな企画ながら、日本文化の原点にこだわりをもっての三日間であった。しっとりと心落ちつく居室空間、緑のしたたる庭園、木造の香り等々……。掛けられた御軸をみていると、生活の中にいきる書とは、という大命題を考えるひとつの手懸りが、ここに確実にあるといえる。

二日目には鳴鶴の故郷・滋賀県彦根市より日下部鳴鶴顕彰会会長の小林鳴竹氏による講演会を開き、顕彰事業の歴史と現状から始まり最後には、講師自らたすきがけとなって鳴鶴の主たる執筆法「廻腕法」の実演まで行われ、先生の手に穴が空くのではと思う位、参加者一同の真摯な視線が注がれた（写真④）。

多胡碑記念館（群馬県吉井町）での特別展に参画して以来、鳴鶴作を通覧して思うことを綴る。①遺墨の数が多い。②依頼に応じた為書が多い。③制作年月や年齢を付すものが多い。とくに七十以降。④条幅作の大半は行草書で、楷書は少ない。⑤草稿類にみる細字は相当早くに完成、真骨頂が表れている。⑥制作のみならず、「論書三十首」の如く書論をまとめている。⑦自画賛作もあるが、蘭・竹・霊芝等画題は限られ、山水図をみない。⑧作品数に比べ共箱作を殆どみない。⑨現在新潟大学が保管する自用印三百余顆に上るが、使用パターンが窺えるようである。⑩人物に関する逸話が少ない。

今般、遺墨をじっと眺め特に感じたのは、その筆管の立っていることと、極めて柔軟な毛質の駆使である。

尚、準備については作品所在調査を十年以上かけて行ってきた。借用とお返しは岡村が担当し、釈文・よみ下し文・図録用の写真撮影に関して新潟大学院生と授業の一環として共に取り組んできた。記念出版物の「後記」に、およそ準備の過程につき触れているのでそれを掲出する。

◇　　◇

暖冬とはいえ、今年は遅くになって降雪にみまわれた。四月の桜が見どころの時に、県内柏崎市での良寛周辺展に協力し、この鳴鶴展とほぼ同時期に準備を進めた。豪雪で輪だちの深味や吹雪で凍結した路面を、広い県内上に下へ借用に走り回った。

昨年の今頃、中林梧竹展を開催した時から次は、鳴鶴と決めていた。どちらも長く温めてきた計画で、これまで拝見してきたものを、眼底に焼き付けてきたレポートである。九十点余に上るが、これ程までの厚みになったのは、常々ご協力賜わっている所蔵者のお陰に他ならない。

実際当事者になると、なかなか借用を切り出し難いもので、また貸し

たくないものである。私は実現させるからには、最善を尽くして内容を充実させ結果を記録保存したく、この様に冊子を発行することにしている。本を作るとなると、場合によっては借用も短期で済まなくなる。準備の手間も相当かさむのだが、やり放しは趣旨にそぐわず、皆実物から撮影してようやくここに上梓出来た。

さて、中には所蔵者ご自身、作品をもっていることを忘れておられる例も、実は少なくない。この点私の特技として、たくさん一度に鑑賞しても忘れない。今般借用をお願いしたものは、十年以上前の取材分から始まっている。

十一年程前のこと、亀田町の御宅では、地元の知己の方に連れていってもらい、当家で書かれた扁額を調査した。当時持参のカメラが不調となり、メモと印象を頼みにずっと憶えていたものだった。御当主は二度目の訪問を前に、七年前ご逝去された。面識のない御令室様へ今春になって書簡をもってお願いをし、久方ぶりに扁額と再会を許され、位牌にお参りをして借帰をいたした。

新潟市内では、二度目の訪問を前に当家が祝融に遭遇、転居先にご連絡をしたところ、不幸中の幸いというべきか鳴鶴は助かった。最初の拝眉が九年も前で、御相手にはこちらがよくぞ、鳴鶴が家蔵に混入していたことを憶えていたものだと驚かれた。何れも一期一会になるやもしれぬ、有難い墨縁のお陰である。皆様には常々本当に失礼を重ねているが、もうしばらく資料の活用を葵の紋所の如くして、我儘を御容赦頂きたい。

尚、褪色一層なる書画研究上、若手の参入が望まれることはいうまでもない。本企画では新潟大学全学共通課目「日本文化論」聴講学生を中心に、見学の上レポート提出を課した。次代を担う人達に、まず実体験してほしいと思うからである。これまでにも学生の反応は意外な程、真摯に興味を持つ。機会を作ることが重要であることを改めて思う。

最後になって恐縮ながら、企画に対して資料をご提供くださった皆様に衷心より謝意を表したい。佐藤海山・高橋禮彌・旗野博・吉岡又司・渡辺保山・利光亜希子・九澤亮子・西絵里子・堀川千夏子諸氏には編集上、特段に助勢を得た。

二、柏崎市での企画展

「三回忌記念　渡辺秀英先生採拓いしぶみ良寛展　併催良寛景慕者名品展」を企画したことにつき、その内容を次に概述する。

全国に知られる良寛研究家・渡辺秀英氏（一九一〇―二〇〇二）の遺墨展は既に行われているが、今回は氏自ら採拓した良寛関係いしぶみ拓本を約四十点、それと良寛詩集「木端（もくたん）集」原本をはじめ研究に用いた諸資料の一部、さらに良寛と交わりあるいは顕彰に関与した文人の書画作など総計百点余りの大規模な追悼展を柏崎市で行う。

渡辺氏の経歴中、昭和二十四年から五年間、旧制柏崎中学校（現柏崎高校）に赴任され、この度は当時の教え子たちが力を合わせ企画が実現したもので、また、上述の拓本資料も縁あって柏崎市内に一括して伝世、このような理由によって柏崎市が舞台となった次第である。

氏は拓本を、良寛書の研究上重視され、採拓法の普及する以前の大正時代から校務の余暇、遠近を問わず現地に出張を重ねた。天候や墨色・紙質・技術・体力等に左右され、同じいしぶみでも全く異なる仕上りとなり、単なる白黒の世界に止まらず、多くを見比べると大いに楽しめる。中でも三条市八幡宮詩碑や良寛修行の地・岡山県円通寺詩碑と良寛伝碑

といった、高さ三メートル弱の巨碑、しかも県外のものが少なくない。国仙墓碑（倉敷市長連寺）や大森子陽墓（鶴岡市明伝寺）等、良寛の師に関するものは、氏が研究著書を出版する過程で用いた資料に他ならない。

一方、良寛ゆかりの文人作は約四十点。貞心尼の短冊は、尼僧を保護した中村藤八の集めた折り紙つきの品。国上周辺に伝わった村山半牧の設色図、相馬御風・安田靫彦（ゆきひこ）の長文書簡は、この地が良寛研究のメッカたるを再認識するもの。ほかに御風作では、戦時中の気運を帯びた語句を書いた珍品があり、富取芳齋作は自用印三十三種を並べ押す。分水町渡部の庄屋・阿部純亭の弥彦詣の作、こしの仙涯作は森哲四郎との合作など計六点だが、皆雰囲気が違うもの。高橋五仙子作は通俗的ではない良寛像三点。その殆どが未公開であり、三十作家の顔ぶれを通観すれば、時代を追うごとに良寛像が膨れゆくさまがつぶさに感じとれよう（「新潟日報」H16・4・7朝刊より）。

その経過報告

公的行政機関ではなく、有志発起人型の企画立ち上げは実際大変な困難をともなう。その手順について、柏崎展の例を摘出する。

1、企画概要

① 平成十五年七月一日「柏崎良寛貞心会」役員会の席上、先般逝去された渡辺秀英先生の拓本が柏崎市に相当数あり、この展示を行ってはどうか、との発議があり、所蔵者の意見も聴きながら、先生の教え子の援助を得て、是非実行との意見確認。

② 同日別記の方々に先生の遺作展示をすることへの賛同、賛同者による展示会企画発起人会についての会合を、七月十九日柏崎駅前「サンシャイン」にて開催する旨案内発送。

③ 平成十五年七月十九日午後六時、「サンシャイン」において、別記出席者が発起人となり、実行委員を選任し事務局は村山照家氏宅に置くことを決定。

具体的作業は、実行委員（村山、駒谷正雄、堀憲一、岡村委員）を主体として進めることを打ち合わせた。

④ 平成十五年七月十九日、中村石油（株）において、採拓品に目を通しながら、展示の可否、要表装・要修理等の作業をし、展示可能予定作品の選定を行った。

⑤ 平成十五年九月十日頃から、全国良寛会・新潟市考古堂書店・報道機関・関係高校同窓会・県庁・教育委員会等行政庁への開催周知を図り、後援依頼等の準備作業に入る。

⑥ 平成十六年一月九日、村山実行委員長宅において、経過報告・企画書の作成・会期・後援者の選定・行事内容（記念講演、展示作品の具体的選定、良寛景慕文人作選定、図冊作成、図冊登載写真の撮影、図冊寄稿文募集、祝賀会の企画等々）および、これに伴う予算（収入源）につき、詳細協議・打ち合わせをする。

2、追悼展開催準備作業

① 平成十六年一月九日から、後援者への後援依頼書発送もしくは依頼（後援者名については、図冊に掲載）。

② 平成十六年二月六日に図冊用写真撮影作業。次いで、柏崎産業文化会館にて、実行委員会を開催、当日までの経過を報告した後、次の事項について審議・協議した。

a 二月六日に図冊用写真撮影（報告）

b 実行委員会の企画書の説明（図冊P七八参照）

c 図冊編集は二月十四日をメドとする

d　渡辺先生を偲ぶ寄稿文を募り、図冊の割り付をし印刷所へ入稿する
e　三月上旬　初校
f　三月中　二校実施
g　〃　実行委員会を開催し、経過報告
h　随時　展示拓本の選定・決定
i　四月上旬　会期四月十日に向け最終打ち合わせ
j　収支予算の概要

③　平成十六年二月十一日　寄付金の募集依頼発送

④　平成十六年三月十五日　追悼展実行委員会　場所・柏崎産業文化会館研修室

協議事項

a　後援依頼の件（状況報告）
b　経理関係報告（現在までの支出状況と寄付金集計状況）
c　展覧会案内状（ハガキ）を各委員に配布、周知方依頼
d　渡辺先生ご遺族・渡辺雅子様との連絡について報告（四十一日の偲ぶ会ご招待の件）
e　記念講演講師　内山知也氏　に決定
f　『良寛景慕者名品図冊』の印刷部数ならびに頒布について
g　○四月九日展示物搬入作業　○四月十九日同搬出作業その他作業担当者について
h　展示期間中の受付当番者について
i　展示初日のテープカットの実施と担当者
j　記念祝賀会（偲ぶ会）の会費と参加者の把握
k　展示修了後の関係者に対する謝礼と事務報告

その反響について、柏崎地元新聞紙が数紙数回にわたって記事にしてくれた。一例を挙示する。

◇　◇

恩師の偉業しのぶ　いしぶみ良寛展で　内山知也さん後援

「渡辺秀英先生採拓いしぶみ良寛展」（同実行委員会主催）に関連して四月十一日、内山知也・国士舘大学非常勤講師（市内出身、文学博士）による記念講演がソフィアセンターで開かれた。会場のハイビジョンホールに入りきれないほどの来場者があり、約二時間の講演を熱心に聴講した。

渡辺さんは明治四十三年、新潟市生まれ。新潟師範学校を卒業後、昭和十四年に柏崎中学校（現柏崎高校）の教諭として赴任。以後五年間、国語・漢文の指導にあたった。良寛の拓本や研究著書が多数あり、三年前に九三歳で死去した。内山さんは、渡辺さんからじかに教わっただけでなく、その後赴任した新潟中学校（現新潟高校）で教諭同士として机を並べた仲。講演では、拓本という根気のいる作業を終生続けた恩師・渡辺さんの偉業と人となりを紹介した。この中で、「柏崎中学時代の思い出として、渡辺さんが阮元の十三経注疏校勘記を持ち歩いていて敬服した」と述べた。

また、「新潟中学時代、渡辺先生は土曜日になると拓本採りにでかけ、月曜日には国語科の教師を集めては『之を読めるか』と問い詰めた。『魔の月曜日』として教師仲間では恐れられた存在だった」とも話した。渡辺さんの拓本を紹介しながら、時間のない中で一人で採拓の作業を続けた恩師の姿に触れ、苦労をしのんだ。

講演に先立ち、岡村浩・新潟大学助教授がスライドを多用して展示作

品を約二十分にわたって解説。講演後には市内の駒谷正雄・全国良寛会参与が展示品の解説を行った。同展は四月十七日まで。

おわりに

鳴鶴展は二日半の会期で、五百人余りの参観者があった。柏崎展の方は八日間で九百位である。共に地方都市での地味な企画の割に、多数の来場者があったものと分析している。またこれまでの経験上、会期の長短が、さほど入場者数とは比例しないことも判明している。

古書画を和室でガラスケース越しでなく、直接鑑賞出来るよろこびを多くの参観者から頂き手応えは大きい。鳴鶴の講演会にも百人以上の参加者があって関心の高さに驚き、かつうれしかった。鳴鶴その他同時代の作家への新たなる情報も寄せられ、伝統文化財の今後の保存の有り方につき一つの呼びかけも行えたものと思う。

問題点は、日常書を専門にしている人との来場者が少ないことである。一方、書道展を開催すると、一般の参観者が今度は少なくなる。壁面芸術として定着した平成の書作品が、日常性とかけ離れたところに位置し過ぎる問題が、ここに大きく浮彫にされる。私の抱負は、両方の展覧会を許容出来る書人口が、少しでも増えるようになればと念じるところにあって、これが本稿の結論部分である。

この点を目指し大学内ではもちろん講義に、そして社会人教育としては「越佐文人研究会」を発足させ、遅々たる歩みながら具体的活動を果たしてきた。最後に、機関誌『新潟県文人研究』創刊号（H10・11刊）「後記」より活動の理念を読み取っていただきたい。

◇　　◇

後記

そもそも本会の発足母体が中心となり、平成九年八月二十五・二十六日に新潟県民会館三階において「越佐にゆかりの文人展」を開催しました。その折には十人に満たない趣味家の集いでしたが、本年平成十年八月一日から六日にかけての第二回展に向けては、少しばかり会らしくなるよう努めてまいりました。会の活動の趣旨に関し、「新潟日報」に寄稿した文を再出させて頂きます。

私は地方と流行文化との接点を探り、中央文化の地域への伝播系路を実地踏査することを楽しみとしている。「豪農の館」の語が示すように、本県には広大な土地を生活・財政の基盤にした地主が各地に林立した。あるじには旦那芸といわれるような、書画俳句詩歌の趣味に興じた者が少なくない。ときには名望家として地域の教育者となり私塾を開き、郷学を支えた例もある。また、江戸期に中央で名を馳せた文人の中には、新潟を訪れたものが大勢おり、それらが滞在したのが地主層の邸宅だったわけである。

今でも旧家を回ると、当時そこで書かれた名筆が掛けられている例を目にする。ひなびた交通の便が悪い地に、著名人の筆による碑文が建っていることも珍しくなく、建碑を企てた昔日の素封家の底力を垣間見る思いがする。

このような書画骨董を愛玩する資性は新潟県人の場合、昔も今も不変の気がする。代々の収蔵品や一般コレクターの所持品には、特筆すべき作家の存在、特徴ある作風をみることがしばしばである。従来この種の作品紹介は、各市町村郷土史研究会が立案し、企画展や会誌での披露が行なわれてきた。これを「文人」をキーワードとして他地区との横の連

係を模索しながら広い視野で、そして系統的に取り扱うような地方史研究の視座を意識して発足したのが、すなわち本会なのである。

この会の活動の特色は、会員が所蔵する作品を持ち寄り展示会を催す点である。一人ほくそ笑みながらの秘蔵もよいが、価値ある作には陽の目を当てたいものだ。八月一日午後から六日まで展示する主な出陳作を挙げると、八木柳雪の遺墨は珍しくないが、万代橋にまつわる佳品。江戸の売れっ子儒者・亀田鵬斎とその影響を受けた石川侃斎（かんさい）、本県書道会の草分け・坂部鶴丘、広橋中軒、近くは越川翠溟。新潟人のために書かれた中国文人のスター・呉昌碩の篆書。日下部鳴鶴書の河井継之助君碑（長岡）と五十嵐氏先世改葬碑（笹神村・現阿賀野市）は、これ以上望めない極精拓が出品される。また、巌谷一六書で中条町に建つ西村梅塢先生謝恩銘は存在が知られ難い名碑である。柏崎では勝田忘庵、桑山太市、村田聴泉。他に巻町金子印房コレクションや磯野霊山、山田寒山の越後路の作など。

活動の趣旨は、地域に埋もれかけている文士の発掘顕彰を通し、次代に伝えたい古い文化財の価値や鑑賞法を一般に知ってもらうことにある。秋になれば機関誌の編集発刊も計画している。関心を寄せてもらい参観を願うとともに、是非多くの方にご入会頂きたい。

その二、『西川町文化協会設立二十周年記念　西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人』「編集後記」より

西蒲原郡近郊町村では、まず分水町に良寛ゆかりの地・五合庵が再建され、駅近くには町立良寛史料館もある。吉田町では粟生津に鈴木文台がでて、一族が学塾「長善館」を経営。史跡は町立の資料館として生まれ変わった。巻町は巻菱湖や館柳湾ゆかりの地で、地道に顕彰を続けている。中之口村では庄屋の敷地を活かし、「澤将藍の館」として一般公開。次いで多分野にわたり、郷土人の足跡を偲ぶ先人館までオープンさせた。味方村は大庄屋笹川邸を保護し、「曽我・平澤記念館」を加えて隣接。潟東村・月潟村にも各々美術館や資料館が建つ。他、すべてを挙げるまでもなく、残念ながら当町は、郡内の上記のような環境施設の水準・有無に関して敢えて比較すれば、底辺に位置するといって間違いない。

公私を含む所謂ハコ物の現状は憂うべし。心中涙をすすりながら冒頭の文を書いたが、ソフト面では如何であろうか。町の生んだ人材には、他町村と比見しけっして遜色ない事績が看取されるわけで、それを証明するつもりで企画展示「西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人展」（H14・10）と、併せて記録の意味で本書を出版する次第である。

私事ながら西川町への初探は平成二年、『越佐のいしぶみ』（新潟拓本研究会編）を頼りに、曽根神社に建つ数基の石碑を採拓するのが目的だった。新保西水の書は実に端正で、石面に美しく映えていた。同じ年、新潟大学に職を得、今度は西川竹園高校へ教育実習研究授業指導のために訪れた。当時は新大前駅から越後線に乗り、越後曽根駅で降りた。帰りの電車の時刻まで時間が随分と空き、商店街通り位まで巡って食事を取りつつ、のどかさに浸りすぎてしまったことが懐かしく思い出される。まさかこの町に住むようになろうとは、夢にも思わなかった頃である。

それが偶々西川町に住むようになったものの、その後は乗用車を駆使し片道二時間以上かかるような所に住む皆さんとの仕事が続き、上越市・柏崎市・長岡市・出雲崎町・北魚沼郡等々で文人展を開催、家には寝に帰る位である。

最近の市町村合併促進策に伴い、西川町もやがてその名を失うことになろう。巨視的には、郡制も消滅し、以降のことは考えてみても、何がどうなるか判らない。この急流の変革期に当り、出来ることは何か、何をすべきかを自問自答した結果、町が「田園文化都市」を標榜するならば、一つの裏付けとなるようなものを具現したく、この度の企画を発願したわけである。

幸い町には文化協会があり、平成十三年半ばに私案を打診したところ、十四年が協会創立二十周年の節目に当るので記念事業として考えたらどうか、とおよその方向性を得られた。だが話が軌道に乗るまでの経緯は、難渋な塗路を幾つも通過し、正直言えば都市部よりも理解を得るのに苦労の山だらけであった。文化協会の坂上實会長とは、恐らく当町としては初の本格的書展であった「南須原一紅遺墨展」を平成十三年六月に開催、実行委員会全体も清々しい手応えを感じていた。今回も坂上会長御指導のもと、走り始めてみれば準備は加速を増すばかりとなった。

町の公報で町内に広く作品情報を募ってからは、一段と反響も大きくなり、個人蔵の資料提供が多く寄せられ、うれしい思いで汗をかいたものだった。今夏の酷暑、残暑の晩夏、そして初秋、調査を繰り返す中で季節のうつろいを肌で感じ、この町に住んでいることを強く自覚出来たのは、忘れ難い財産となるに違いない。

調査はまず坂上氏、そして文化財調査審議会委員で広い交友を有する大橋三郎氏と大島利道氏とが下見をされ、次いで私が加わって三、四人で改めて伺う形で進められた。結果、たくさんの情報を賜ったにもかかわらず、スペースの都合で展示や本書への収録がその一部となった点は、ご所蔵者の方々に深くおわび申し上げなければならない。しかし、この調査によって得た、いわば西川町文化財台帳は、今後また別の形で活かせるであろうし、そのためにも可能な限り徹底して調査を行ったつもりである。

なお、『町史』はないが、それに勝るものとして『西川町史考』が毎年刊行されている。これまでの時代をよく知る執筆者が、高令のためこの度ご指導を仰げなかった面が大きかったのは、誠に残念なことである。個人宅への取材も、祖父の代の方が居られたことによって、話を窺えた点が多々ある。今後代替わりが進むにつれ、このような企画は実現不可能になることは明らかである。当町で、最初で最後の文化事業といわれるのは、確かである。

したがって、本書は小冊子といえども、美装を凝らし、後世に伝えるべきものとしてグラビアはすべてプロに入念に撮らせた。論考は田子了祐文化財調査審議会委員長を中心に、本間・日野・大橋・棚橋・大島諸先生よりの大切な視座が盛り込まれ、資料的に価値を帯びたものに仕上がったと思われる。かつ、この企画に尽力した方々の熱気を伝えると共に、親しみのもてる読み易さにも考慮したつもりである。数次に及んだ実行委員会は、仕事や家事の合間に時間を割いてくださった人々のお陰で成立したものだった。

時が経過する中、かつての西川町の学・芸・道の文化水準を振り返る際の写し鏡として、次代にこの企画が語り継がれるようになれば、町に縁を持ったものとしてこれに過ぎるよろこびはない。

最後に、貴重な所持品をお貸しくださった方々、協賛を賜った多くの皆様、そして運営にたずさわった実行委員、ご協力頂いたすべての方に心よりお礼申し上げます。

新潟市芸術文化振興財団助成事業

近代書の源流

日下部鳴鶴展

とき 平成16年4月30日(金) 13時～16時30分
5月1日(土) 9時30分～16時30分
5月2日(日) 9時30分～16時

ところ 燕喜館 新潟市一番堀通1―2
(白山公園内 TEL025(224)6081)
〈入場料 五百円〉

趣旨 日下部鳴鶴（くさかべめいかく・一八三八～一九二二）は滋賀県生。明治の三筆と冠された近代日本書道の顔である。今日様々な書道の会派が隆盛を呈す中、その源流をたどってみると殆どが鳴鶴につき当たるといってよい。
鳴鶴が逝って82年、華美と多姿を競いがちな現代書壇を反省する材料として、もう一度原点を見つめる機を設けたく、展覧を企画する次第である。なお鳴鶴は、明治十六・十七・十九・二三年の四度、新潟県への来遊が確認され、今回は越後路で書かれた作を中心に集め、新潟に及ぼした大家の影響を考えることも目的としたい。

企画内容
①新潟県に伝世する遺墨 40点(掛軸・扁額・屏風・巻子本)の展観
②記念講演会 5月1日(土) 13時より会場にて
○小林鳴竹氏(滋賀県・日下部鳴鶴顕彰会会長)
○岡村鉄琴氏(新潟大学助教授)
(他・新潟大学大学院生)
③記念出版『日下部鳴鶴遺墨萃編』刊行 (二千円)

主催 越佐文人研究会
後援 新潟市
連絡先 〒959-0438 新潟県西蒲原郡西川町下山340―2
TEL0256(88)5335

三回忌記念

渡辺秀英先生採拓いしぶみ良寛展

併催 良寛景慕者名品展

会期 平成16年4月10日(土)～4月17日(土)
10時～17時

会場 柏崎市立図書館(ソフィアセンター)
〒945-0065 新潟県柏崎市学校町2―47
TEL0257(22)2928(入場無料)

主催 渡辺秀英先生追悼展実行委員会
後援 新潟県・柏崎市・柏崎市教育委員会・全国良寛会・柏崎市良寛貞心会・中村石油株式会社・新潟日報社・柏崎日報社・越後タイムス社・柏新時報社・柏中柏高同窓会・青山会・越佐文人研究会

展示内容
渡辺秀英先生採拓良寛碑拓本及び渡辺先生遺墨 良寛景慕者作品
(貞心尼・有願・村山半牧・林甕雄・安田靫彦・會津八一・相馬御風・吉野秀雄・こしの千涯・権田雷斧・横尾深林人・原宏平・中林梧竹・山田寒山・富取芳斎・阿部純亭・亀田鵬斎・山田静里・小林存・高橋五仙子・今川魚心子・勝田忘庵・吉田縹亭・富川潤一・小川千甕等) 「木端集」原本他資料
総計100点

平成16年4月11日(日)13時30分

同館 ハイビジョンホール

作品解説 岡村 浩氏(新潟大学助教授)

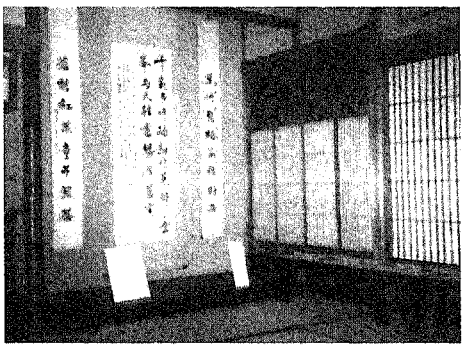
記念講演 内山知也氏(国士舘大学非常勤講師)
同日14時～

駒谷正雄氏(全国良寛会参与)
同日展覧会場にて15時より

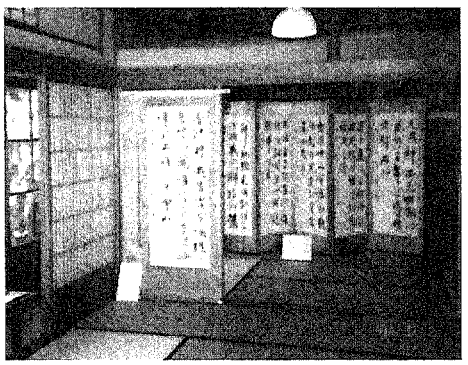
記念出版
『良寛景慕者名品図冊』(千円)

事務局 村山照家 〒945-1341 柏崎市茨目3―1―48
TEL0257(22)4272

鳴鶴展入口 ①

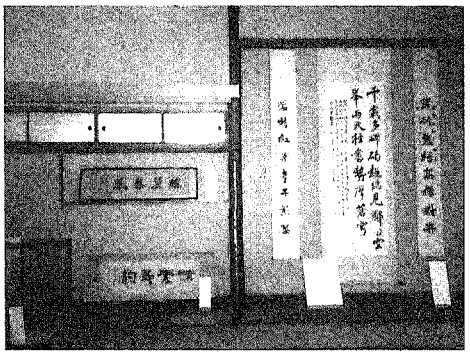


会場風景 ②

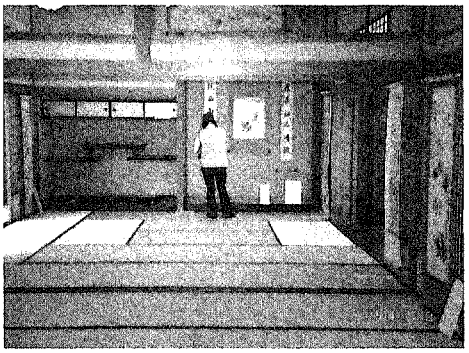


会場風景 ③

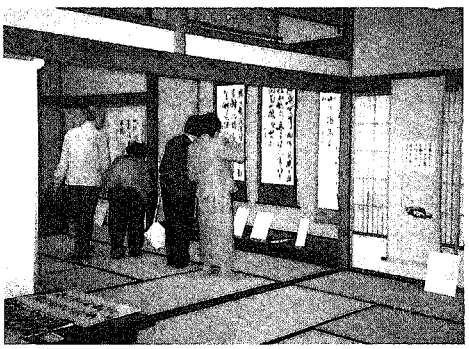
小林講師実技披露 ④



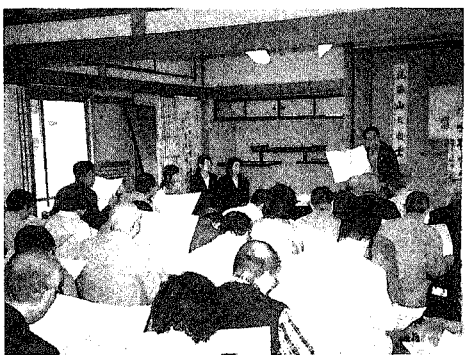
⑤



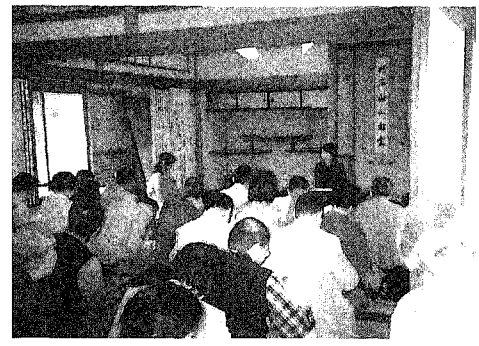
⑥



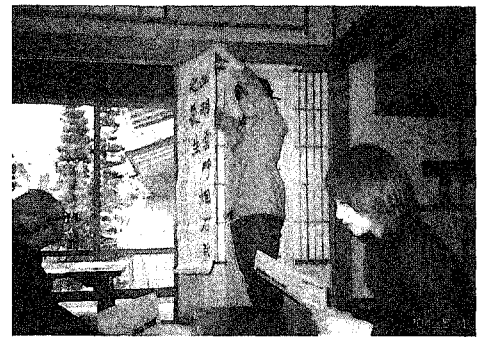
⑦



講演風景 ⑧



院生・西氏研究発表 ⑨



同　上 ⑩

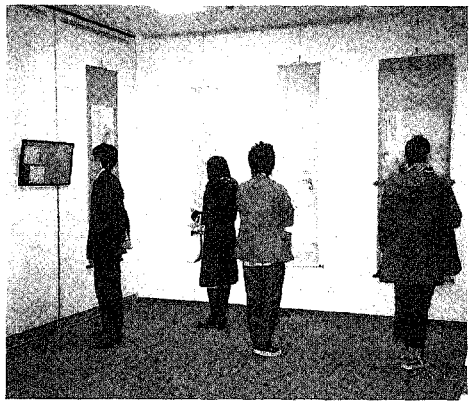
柏崎拓本展　内山知也氏講演 ⑪

右から内山・堀憲一事務局・齋藤信夫全国良寛会会長・渡辺雅子様 ⑫

柏崎展会場にて　駒谷正雄氏解説会 ⑬

同　上 ⑭

柏崎会場入口 ⑮



本間翠峰展（H15・11・県民会館） ⑯